同じ、されば、するがは洲寄る所にて、浪の洲を打寄せて、人の行かふべき所と成れるを云、

〔萬葉集三雜歌〕詠不盡山歌一首幷短歌

奈麻余美乃、甲斐乃國、打縁流、駿河能國與、己知其智乃、國之三中從、出之有、不盡能高嶺者、〇略下

〔萬葉集二十〕和伎米故等、不多利和我見之、宇知江須流、須流河乃禰良波、苦不志久米阿流可、

右一首、春日部麿、〇駿河國防人

〔詞林采葉抄五〕打縁流駿河國

打よするするがの國とは異儀多く、波のすなごを打よするとつゞけたりとも、亦彼國には富士と葦高との二の山あり、是則金胎兩部の垂跡也、此兩山の間は、昔は東海道の驛路也、その間に横走の關と云ありけり、此道は觸穢の者の通けるを、明神いとひ給て、南海に浮島原の砂のゆられあるきけるを、打寄させ給ひければ、打寄る駿河國と申とも云へり、今或記云、昔富士山は海中より涌出して波に隨て、うかれけるに、もろ〳〵の天女あまくだり舞遊けるを、白波打寄て、此國の山となれりけれは申とかや、是蓬萊にて有と云說、符合する歟、

〔冠辭考二宇〕うちよする　するが　又うちえする

萬葉卷三に不盡山詠　奈麻余美乃、甲斐乃國、打縁流、駿河能國與、己知其智乃、國之三中從、卷二十に、駿河國防人　宇知江須流、須流河乃禰良波、云々、こは音し通へば、打よするとも打えするともよみたるを思へば、その二つもはた正しからで、實は打泔る泔髮てふ意につゞけなしけんかし、髮を櫛梳るとき用る水をゆするといへば也、さて此國はいとはやき川有故に、する河とはいふらめど、今ゆするかみのゆとみを略けるが如くいひなすは冠辭也、同卷二十に、同國防人の多々美氣米、牟良自加已蘇てふは、薦を編といふを、あを略きてつゞけたる類ひ也、する河てふ名につきて浪の打よするといへる說あれど、波ともいはで打よするといはんは、古歌の冠辭ともな